

「普通」は一つではない

校長として初めて赴任したS中学校に、車いすの女子生徒A子がいきました。小学生の時には、障がいのある子どもたちが学ぶ学校に在籍していましたが、中学では地元の学校で学びたいということで、彼女はS中学校に入学しました。

彼女は三年生でした。学年の人数は五十人強。二クラスしかありません。校舎内に北中のようなエレベータはなく、階段を移動するときには、手すりつかまかって不自由な脚を引きずりながら自力で上り下りしました。仲間は、車いすを上や下に移動させることで彼女を支えました。

学校生活の中で彼女が自分だけでやれないことは、たくさんありました。それは障がいがある以上仕方がないことです。その度に仲間は彼女に手を差し伸べ続けました。私は仲間が彼女を支える光景を見て、安心したり感動したりしていました。しかし、あの時の光景ほど、私の脳裏に深く焼き付いているものはありません。私は卒業式の式辞で、目頭を熱くしてその時のことを語りました。

地区の五つの中学校の三年生が一堂に会する合唱交流会がありました。大きなホールにひな壇を組み、そこで五つの中学校の三年生（一部の学校は、他学年や全校でした。）が合唱を披露しました。その地区には、大きな規模の学校はなく、どこも五十人前後の参加者でした。したがって、ステージのフロアではなく、ひな壇の一段目に最前列の生徒が並び、指揮台と同じ高さで歌いました。

いよいよS中学校三年生の出番となりました。生徒たちが静かに入場し始めました。仲間の男子生徒に車いすを押してもらって、A子もステージの袖から出てきました。最前列の中央辺りで車いすが観客席の方に向きを換えると、彼女を中心にしてその左右に最前列の生徒が並びました。

私はすぐに気づきました。A子がいるために、S中学校の最前列に位置する生徒は、ひな壇の一段目ではなく、A子と同じステージのフロアに並んだのです。その時のことを、私は卒業式の式辞で次のように語りました。

「T（地名）で行われた他校との音楽交流会でも、最前列がひな壇に上っていた他校とは違い、S中三年生は、ステージのフロアを最前列として合唱しました。S中の関係者以外、だれも気付かない小さな小さな事実でしょう。やっている君たちも、普通のこととしてやっていたのかもしれませんが。しかし、ためらいなくそれができることが君たちのすばらしさです。三年間、A子さんと中学生生活を共にしてきた君たちが身につけた優しさです。」

今日は「ひびき合いの日」。「普通」ということについて深く考えましたね。私がいいた時のS中学校では、A子の車いすを移動させたり押したりすることは「普通」。A子と同じフロアに立つことも「普通」でした。「普通」は、一つではないのです。

（十二月三日記）

